おじさんズ通信

２０２３年１１月号（No３６）
発行元：登別市新生町
桃柿通　緑風舎
発行者：おじさんズ３号

発行は毎月１５日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

恵庭にて

晩秋の並木道で寿限無（じゅげむ）

十一月某日
ちょこっと、恵庭市まで遠出した。お目当てのカフェで小一時間過ごし、外に出るとバイト学生風のお嬢さんが、店先の歩道でせっせと落ち葉を掃き集めていた。
「『寿限無』って、知っている」
「はい、知ってます」
「あの中の海砂利水魚（かいじゃりすいぎょ）って分かる」
「さあ～」
「海の砂利や水は果てしなくあるという意味。落ち葉も同じ」
「へえ～」
講釈をしてしまい、後から野暮なジイ様のたわごとだったかと、ちょっぴり反省…

よそ者には「旅情」、落葉集める恵庭市民には「無情」のイチョウ並木

次なる目的地、恵庭市郷土資料館へ向かう途中に現れたイチョウ並木に思わず「おお、すごい！」。
車を降りて、向かい側の歩道にわたって撮影しようとしたら、チャリンコで通りかかった観光客らしき男性が「僕も写真、撮りました！」
ただし住民には迷惑な晩秋の光景らしく、歩道脇に置かれた落ち葉専用ゴミ袋がその労苦を代弁してました。

郷土資料館訪問

郷土資料館は入館無料。オープンは平成２年で、２階展望台を除くと基本平屋の構造です。
そして展示物もさることながら、一番に目をひいたのは、タッチペンでモニター画面を操作する市史や古文書、映像資料などをおさめた「デジタル資料検索閲覧－システムでした。

各種史資料などを検索、閲覧できる画像システム

業者に発注すれば、数百万円はするという代物。女性の館員に聞いてみると、会計年度職員の中にスキルのある人がいて、お安く出来上がったという。
う～ん、わがマチの資料館にこんなシステム、あったかな？
街並みを含めて隣の芝生はなんとやらーのチョイ旅でありました。

自宅にて

やや！　アカゲラが来た

１１月某日の昼、なにげなく窓の外に目をやると、やや！　アカゲラが我が緑風亭に見参したではないか。
見ていると、柵代わりにしたクルミの木の棒に取り付き、おなじみのツッツキ行動をくり返しながら、上へ、上へ。てっぺんまで行くと隣の棒に跳び移り、なんとも忙しい。
おっと、証明写真だ！　大慌ててカメラを向けて、数枚パチパチ。さすがに往復運動の激しい頭部はブレましたが、鑑賞に耐えそうな１枚が左の写真。家人に話すと、何年か前にも柿の木にとまっているのを見たというから、残念、初の来訪ではなかった。
数日後、庭のジュゲムをかき集めていたら、お向かいさんが「ねえ、ねえ、この前、なんて言ったっけ。北海道のかわいい白い鳥、ここに来たよね」。
言われてみたら、確かに半月ほど前、わが目を疑う珍客が。
「シマエナガ？」
「そう、そう、来るんだね～」
初雪の日、柿の木の実を数えてみると７０個ほどに。
ヒヨドリたちよ、今年も小ぶりながら越冬用食料は確保したぞー。

「史観　金の幌別川」

自身も勤労に汗した幌別鉱山の歴史を、先人の書き残した日記を中心にまとめた長内弘氏（故人）の「史観　金の幌別川」（平成６年上梓）。まずは手書き文章をテキスト・データに―と、入力作業中です。

日記とは、開鉱翌年の明治４０年４月から大正１０年４月まで幌別鉱山に勤務した長野県出身の金井抱二さん（昭和４１年死去）の書き残したもので、鉱山史を語る上で欠かせない歴史の証言者といっても過言ではありません。

１０冊の日記を、コツコツと読み解き、必要と思われる箇所を書き写し、まとめたのが長内氏です。

鉱石用ゴンドラで山越え？

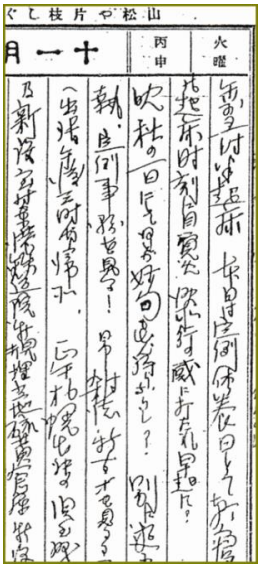
データを打ち込むうちに、「へぇ～」と感心させられる箇所がいくつも登場します。

例えば、大正９年９月２日の日記。

「午後三時硫黄山梁瀬氏来山、引継退山鉱夫賃金支払金を持参のため即時計算、其の他終了。**五時鉄索にて帰山**」

当時、壮瞥町黄渓にあった事業所から来訪した梁瀬氏が、硫黄製品や鉄鉱石を運ぶ索道＝ロープウエーで帰ったと書かれています。幌別鉱山から大峠を越えて、北へ１．６Km先の北海道硫黄㈱幌別鉱業所へ鉱石運搬用ゴンドラに揺られて帰る。電動式とはいえ、万一、山中で止まったら降りて、歩くのかな？。今なら、間違いなく労基署の始末書もの。それより、山オヤジに出会ったら、どうするんだろう。

◆ くせ文字余談



金井氏の日記の写し（**右の写真**）を見て判読不能の文字に出くわすたびに、なぜか、北海道新聞の三大悪筆記者といわれたＫ氏のいかつい顔を思い出します。

道新退職後、室蘭民報社に招へいされた識見豊かな新聞人ですが、現役記者時代の手書き原稿文字がデスク泣かせ、文選工、キーパンチャー泣かせだったといいます。

私も一、二度見た記憶がありますが、確かにミミズが這ったような、特徴のあるクセ文字でした。しかし、記者会見で当事者が言葉を発する都度、パソコンのキーを必死にたたく現代の記者たちを見ると、情を挟む余地のないスピード優先の世界になったものだーと嘆き、悪筆を許容した個性尊重の時代を懐かしむのであります。

名画を観て、ひらめいた「哀愁の亀田公園」があってもいいじゃないか

２０年前に公開されたフィンランド映画「過去のない男」。先日、初めて鑑賞しましたが、確かに家人が大好きというアキ・カリウスマキ監督の感動作でした。カンヌ映画祭でのグランプリも、うなずけます。

そして劇中で救世軍バンドのヴォーカリスト、アンニッキ・タハティが「思い出のモンレポ公園」を切々と歌うシーン（**写真左**）を見て、ひらめきました。

「『思い出の亀田公園』があってもいいじゃないか。それとも『哀愁の亀田公園』？　いや『黄昏の』かな」

近くにある公園の、音楽付き動画による“勝手にわがマチ PV（プロモーション・ビデオ）”案です。公開先は、はやりの YouTube でいかが？

ただ、ジモトの人々の反応は、予想がつきます。

「公園の名前がね～」「それほど詩情豊かな場所か」

いやいや、ご安心あれ。「思い出のモンレポ公園」の歌声に心酔わせるうちに、どんな所だろうーと探訪心をくすぐられたように、PV を見て「カメダ・パークをこの目で」と、海峡の向こう、いや海外からも続々と……。妄想ですかね？

薫風　烈風

▶「脚本を書いているうちに、民主主義の限界が見えてきました。SNS が過剰に行き渡った社会では、みんながよほど教養を持ち合わせていないと、民主主義は誤った方向に進んでしまいます。羊の群れが一定方向に走り出す時のように、個はマジョリティーにのまれるのです」

先月の朝日新聞夕刊に載っていた映画「ヨーロッパ新世紀」の監督クリスティアン・ムンジウの言葉です。

東欧ルーマニアのトランシルバニアが舞台の、人々の不寛容を描こうとした作品とか。機会があれば観ようと思います。

▶「寿限無」で、思い出すのは高校時代から付き合いが続いた親友 T のこと。空手部に所属し、応援団長でもあった彼が、ある日体育館で「『寿限無』全部言えるか。俺は言える」と胸を張り、「ジュゲム、ジュゲム、ゴコウのスリキレ」と唱えました。思い返すたびに（ガキっちょだったな）と変に懐かしむ次第です。

では皆様、パイポ、パイポで、お元気で～。